

～ 【 ピンチをチャンスに 】 ～

部活動にも参加できず、修学旅行に向けて時間を惜しまず毎日遅くまで準備してくれた実行委員会の生徒達、そして楽しい思い出になるはずだった修学旅行が、モノクロームの空しいだけの思い出になってしまった生徒達のことを思ってこの通信を書きます。

昔、昔、昭和の時代、コメディアンであり映画監督でもあるビートたけしが、著書の中で「赤信号、みんなで渡れば怖くない。」と言いました。「少々問題があるが、俺だけじゃないから、ま、いいか。」という事で同調行動をとってしまふ日本人らしさを見事に表現しています。



時代は令和になり、民間日本人が宇宙に行き、幼児までがスマホというICT機器を使いこなす社会になりました。しかし私達の精神の中には、時代の流れについていけず、昭和のままの部分がまだまだたくさんあるようです。そんなことを思わざるを得ないできごとがありました。

入念な準備、指導、連絡があっていたにもかかわらず、たくさんの生徒が修学旅行にスマホを持参し、写真やメールを同学年や時には3年生にも送っていました。修学旅行団をこれまで何度も引率しましたが、こんなことはかつてありませんでした。とにかく驚くばかりです。まずは私達の指導の甘さを痛感し、恥じるばかりです。

コロナ禍で1年生の時には集団宿泊教室が中止となり、学年全員での宿泊はこの修学旅行が最初であり、最後となります。だから子ども達もこの修学旅行が楽しみで楽しみで仕方なかったのでしょう。そんな気持ちは分からないではありません。

しかし、あと一步先まで考えを巡らしてほしかったと思います。持っていきたいのに我慢している生徒に申し訳ない、1万円の小遣いをくれたお父さん、お母さんに申し訳ない、一生懸命になって準備をしてくれた実行委員の生徒に申し訳ない、そんな思いを持つことができれば、きっと心にブレーキをかけることができたと思います。

今回の件にしても何にしても、いざという時に心にブレーキをかけられる人は、「メタ認知」ができる人です。「メタ認知」とは簡単に言うと、自分というものを自分の外側から見ることのできる力です。「今、俺はスマホをバッグに入れようとしている。これでいいのか。」と自分の行動を自分で分

析できる力です。特に今回は、スマホを持ってきている自分を友達や先生の視点から見つめ、イメージすることができれば、おそらく修学旅行後に先生方から指導される場面はなかったと思います。

今回、子どもさんのスマホ持ち込みで学校においていただくことになった保護者の皆様、学校の指導にご協力していただき誠にありがとうございました。今回の件をバネに、子ども達がより賢く、より謙虚になる機会になれば、と思います。ピンチをチャンスに、と申します。彼らが1年半後、この鹿南中を卒業するときには今以上の素晴らしい学年に成長し、修学旅行でたくさんの生徒が叱られたことがきっかけになったよね、と言われたいですね。

ただ修学旅行自体はこれまでにない素晴らしいものでした。けんか、争いごと、病気、大きなケガはないし、ホテルの備品がなくなったり、部屋が破損したりすることも皆無、大雨の中、ほとんど聞こえなかった薬師寺での講話も、全員が一生懸命に耳を傾けていました。すばらしい学年に成長する資質は十分備えていると感じました。

～ 【 忘れ得ぬお土産 】 ～

「光差し 赤染まりゆく あおもみじ」

せつかくの修学旅行も初日から空は鉛色。雨で、楽しみにしていた班別自主行動もつまらなさそう、と思いきや、雲の切れ目から日の光が差し込み、それがもみじにあたり、周りの風景もそして自分の心も急に色づき始め、楽しい一日が到来した、と中学生らしい気持ちが、歯切れよく、かっこいい言い回しで表現されています。修学旅行のお楽しみコーナーで「俳句大会」が開催されました。全員の作品を読みましたが、ためらうことなくこの作品を「学校長賞」に選びました。最初に読んだ時は彼の絶妙な表現に感動し、鳥肌が立ちました。私には到底書くことはできません。ただただ「すごい！」と思いました。わずか17文字に自己の感性や世界観を表現できるということは、すばらしい才能です。

この句は2年2組の東佳伸君の作品です。普段は野球に打ち込むスポーツ少年ですが、同時に豊かな感性と表現力を備えています。私は、俳句は苦手ですが、この句はいつまでも忘れ得ない、修学旅行の大切なお土産になりました。

